

令和2年度
とっとり学力・学習状況調査
報告書

一人一人の成長を支え
確実に伸ばす教育を目指して

令和3年2月

鳥取県教育委員会

目 次

第1章 調査の概要と結果	
(1) 調査の概要	1
(2) 調査の結果	3
(3) 調査に関する Q&A	5
第2章 調査結果の活用	
(1) 個人結果個票の見方について	7
(2) 非認知能力・学習方略に関する分析について	8
(3) 主体的・対話的で深い学びの実現について	13
(4) 帳票40を活用した分析について	14
(5) 校内での活用方法について	15
第3章 調査結果活用協力校の取組	
鳥取市立城北小学校	18
第4章 特徴的な学校の取組紹介	
鳥取市立世紀小学校	21
鳥取市立岩倉小学校	23
鳥取市立青谷小学校	25
米子市立福生東小学校	27
米子市立加茂小学校	29
米子市立大篠津小学校	31
第5章 学習指導のポイント	
(1) 国語（小4・小5・小6）	33
(2) 算数（小4・小5・小6）	41
第6章 質問紙調査結果からみられる傾向	47
第7章 分析支援プログラムによる分析 （質問紙調査とのクロス集計結果より）	62
第8章 参考資料	
とっとり学力・学習状況調査の分析に係るスケジュール	68
令和3年度鳥取県学力向上戦略図	69

第1章

調査の概要と結果

調査の概要や特長、結果について掲載しています。
また、調査に関するQ&Aも掲載しています。



(1) とっとり学力・学習状況調査の概要

子どもたち一人一人の学力の伸びや学習状況を把握することにより、子どもたち一人一人の成長を支え、確実に伸ばす教育を進めます

小中学校の時期は、子どもの「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」を育む大切な時期です。伸びる時期やスピードは様々ですが、一人一人は一步ずつ確実に成長しています。

「とっとり学力・学習状況調査」は、「学習した内容がしっかりと身に付いているのか」という従来の学力調査の視点に、「一人一人の学力がどれだけ伸びているのか」という新たな視点を加えることで、子どもたちの成長を促すものです。

鳥取県教育委員会では、本調査を通して、市町村教育委員会と協力しながら、とっとなりの子どもたち一人一人の学力を確実に伸ばす教育を進めていきます。



とっとり学力・学習状況調査の「3つの特長」

◆特長1

毎年の学力調査の結果を見比べることによって、1年間の学習の積み重ねを「学力の伸び」として見るができます。

※「学力の伸び」は2年目以降の調査から見るできるようになります。

◆特長2

質問紙調査（アンケート）の結果から、ルールやマナーを守る意識や、目標に向けて粘り強くやり抜く力などがどれだけ身に付いているのかが見えるようになります。これらの力は、学力と強く関係しているといわれています。

◆特長3

調査の結果から、学力を伸ばしている効果的な指導方法を明確にし、授業改善や児童一人一人に応じた指導・支援をさらに充実させることができます。

令和2年度とっとり学力・学習状況調査の概要

◆期 日 令和2年6月23日（火） ※予備日：6月24日（水）

◆学 年 小学校・義務教育学校4、5、6年生

◆調査事項 国語、算数、質問紙調査（アンケート）
※出題範囲は、調査を受ける前の学年までに学習した内容です

◆結果の返却 令和2年10月26日（月）

※令和3年度は小学校・義務教育学校4年生から中学校1年生・義務教育学校7年生まで、令和4年度は小学校・義務教育学校4年生から中学校2年生・義務教育学校8年生までを対象として、調査を実施する予定です

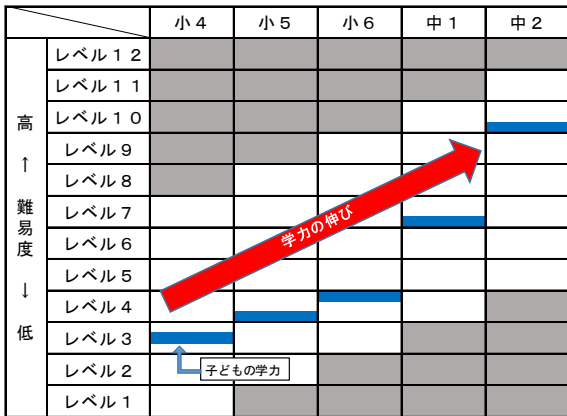
※令和3、4年度の調査事項は、国語、算数・数学、質問紙調査（アンケート）の予定です



とっとり学力・学習状況調査により、一人一人の学力の伸びを支援

とっとり学力・学習状況調査の特長

問題ごとに難易度を設定した学力調査を継続して実施することにより、子ども一人一人の学力の伸びを把握し、指導に生かすことができます。



◇全部で12のレベルがあります。(各学年で測定可能なレベルは7レベル)
◇1つのレベルをさらに3層(A~C)に分けています。

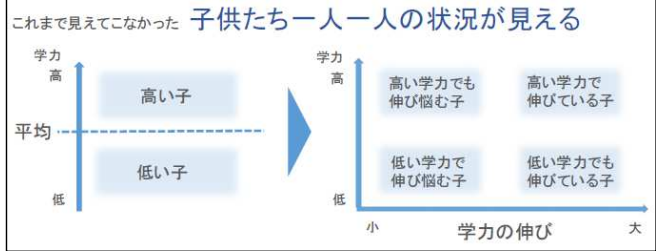
【埼玉県と協定を結び、共同実施を予定】

- ◇埼玉県は平成27年度から開始(毎年約30万人に調査)
- ◇一人一人の学力の伸び(変化)を継続して把握することのできる自治体初の調査
- ◇埼玉県は4年連続で全国学力調査の結果が伸びている
- ◇平成31年度から福島県と共同実施を開始
- ◇平成30年度プラチナ大賞で次世代育成賞を受賞
- ◇中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会(R1.10.29開催)において、本調査について報告

【項目反応理論 (IRT)】

- 出題するすべての問題に同一尺度で難易度を設定
- ◇異なる調査間での学力の比較が可能
- ◇PISAやTOEFLと同様の調査手法

学年ごとの難易度の設定範囲



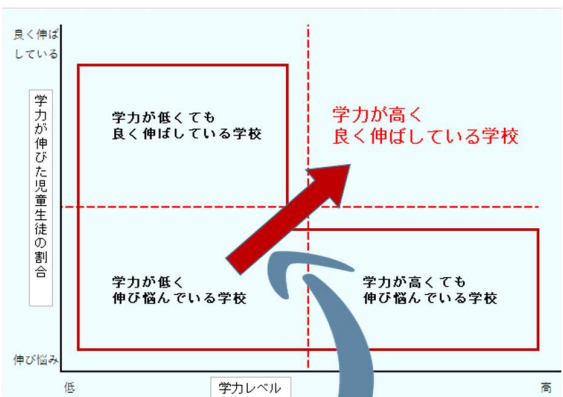
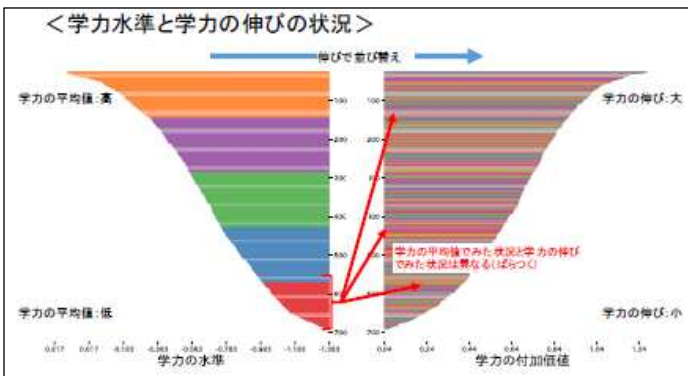
- 伸び悩む子どもには、つまづきを早期に発見し、支援が可能
- 伸びた子どもには、頑張りを認め、一層やる気を引き出したり、より高いレベルへの挑戦を促すための支援が可能

本県のスモールスケールを強みとした、児童生徒一人一人に応じたきめ細かな指導・支援の充実



とっとり学力・学習状況調査により、市町村教委と連携して学校を支援

<学力水準と学力の伸びの状況>



**学力が高い学校が学力を大きく伸ばしているとは限らない
(学力が低い学校が、学力を伸ばしていない学校とは限らない)**

学力の伸びの状況



学校の実情に応じた重点的な支援

- 管理職の意識改革、マネジメント能力の強化
- 教員の意識改革、授業改善の推進

- 効果的な指導を実施している教員が多い学校
- 教科や学力層を問わず学力を伸ばしている学校

市町村の枠を超えて効果的な取組を共有する仕組みづくり



(2) とっとり学力・学習状況調査の結果

1 調査の目的

本県の児童の学力や学習に関する事項等を把握することで、教育施策や指導の工夫改善を図り、児童一人一人の学力を確実に伸ばす教育を推進する。

2 調査の特長

◇個人の学力の伸びを継続して把握することができる。

※学力の伸びが把握できるのは2年目以降

◇質問紙調査によって、非認知能力や学習方略を把握し、指導に生かすことができる。

※非認知能力：自制心、自己効力感、勤勉性、やりぬく力

※学習方略（学びに向かうときの態度や学習の仕方）：柔軟的方略、プランニング方略、作業方略、人的リソース方略、認知的方略、努力調整方略

3 調査実施日

令和2年6月23日（火） 予備日：6月24日（水）

4 参加学校・参加人数

	参加学校数	参加人数		
		4年生	5年生	6年生
鳥取市	小学校39校 義務教育学校4校	1,488人	1,529人	1,526人
米子市	小学校23校	1,245人	1,307人	1,222人
合計	小学校62校 義務教育学校4校	2,733人	2,836人	2,748人

5 調査事項

小・義務教育学校第4学年から第6学年：国語、算数、質問紙調査

6 埼玉県教育委員会との連携協定

本調査は、埼玉県教育委員会と締結した連携協定に基づき、調査問題の相互利用等をしながら実施する。なお、埼玉県では、平成27年度から埼玉県学力・学習状況調査として実施している。

7 調査問題の公表について

本調査は児童の学力の経年変化を見とるための調査であるため、調査問題の内容については非公表とする。ただし、調査問題の一部については、調査結果をまとめた報告資料に記載する予定。

◇当該学力・学習状況調査結果については、成長段階にある児童等の心情に配慮し、序列化や過度の競争等が生じることのないよう使用しなければならない。
 ◇本調査の目的は、平均正答率を比較することではなく、個人の学力の伸びを継続して把握することである。しかし、本年度は学力の伸びを把握することができないため、平均正答率のみを示している。

8 鳥取県の平均正答率（％）

	小学4年	小学5年	小学6年
国語	61.6	63.4	58.9
算数	60.4	60.5	60.5

9 鳥取県のカテゴリー別正答率（％）

【国語】

	教科の領域別 平均正答率			評価の観点別 平均正答率				問題形式別 平均正答率		
	話すこと・書くこと	読むこと	伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項	話す・聞く能力	書く能力	読む能力	言語についての知識・理解・技能	選択式	短答式	記述式
小学4年	39.1	57.0	69.3	32.2	43.7	57.0	69.3	62.9	63.3	23.4
小学5年	43.5	63.8	67.8	48.1	39.0	63.8	67.8	64.5	65.6	17.0
小学6年	59.8	62.7	56.7	68.7	50.9	62.7	56.7	56.5	67.8	28.7

【算数】

	教科の領域別 平均正答率				評価の観点別 平均正答率			問題形式別 平均正答率		
	数と計算	量と測定	図形	数量関係	数学的な考え方	数量や図形に ついての 技術に	数量や図形に ついての 知識・理解	選択式	短答式	記述式
小学4年	65.1	72.1	46.6	53.1	50.0	64.8	61.2	60.3	61.0	51.7
小学5年	56.1	60.7	63.1	66.5	53.2	63.1	66.1	63.8	59.6	27.4
小学6年	65.0	59.2	56.1	58.3	64.7	59.0	60.3	61.6	59.3	62.3

(3) 調査に関するQ&A

【Q1】

「学力レベル」とは何ですか。

【A1】

とっとり学力・学習状況調査では、様々な難易度の問題を出題し、それに対する正答や誤答の状況を見て、「学力レベル」を判断しています。そのため、全ての問題に難易度を設定しています。

【Q2】

問題の難易度は、どのように設定しているのですか。

【A2】

例えば、計算問題では、次の例のように難易度を設定しています。

問題の難易度	問題例
6	$0.7 \div \frac{2}{3}$
4	$5.6 \div 1.4$
3	$52 \div 4$

割り算に分数も入るため、難易度がさらに上がって「6」となる。

割り算に小数が入るため、難易度が「4」に上がる。

整数同士の割り算である。本調査では難易度を「3」と設定している。

【Q3】

「学力レベル」は、どのくらい設定されているのですか。

【A3】

学力レベルはレベル1からレベル12まであります。各学年の測定は、次の表のように7レベルの間で行います。また、それぞれのレベルはさらに細かく3層（高い順にA→B→C）に分かれています。児童生徒には、学力レベルをこの小さな層で分けた1-Cから12-Aまでの36段階で提示されます。

なお、鳥取県では、今後段階的に学年を上げていき、最終的には小学校4年生から中学校2年生までの調査を実施する予定です。

学年	学力レベル	学年	学力レベル
小学校4年生	レベル1～レベル7	中学校1年生	レベル4～レベル10
小学校5年生	レベル2～レベル8	中学校2年生	レベル5～レベル11
小学校6年生	レベル3～レベル9	中学校3年生	レベル6～レベル12

【Q4】

同じ正答率の場合、同じ学力レベルになるのですか。

【A4】

同じ学力レベルにならない場合もあります。

とっとり学力・学習状況調査の問題は、正答率が高いか低いかではなく、どの程度難しい問題に正答できたかでレベルが決まります。

例えば、AとBの児童生徒が同じ10問を解答した場合に、Aが一番易しい問題を1問間違えて、残りは全て正答し、Bが一番難しい問題を1問間違えたとします。この場合、正答率で考えると、AとBの学力はいずれも90%で同じということになりますが、本調査においては、より難しい問題に正答できているAの学力レベルの方が高くなります。

【Q5】

学力レベル7で考えた場合、小学校4年生の学力レベル7の児童と、小学校6年生の学力レベル7の児童の学力は、同じと考えてよいのでしょうか。

【A5】

とっとり学力・学習状況調査の学力レベルについては、学力レベルが上がるほど難しい問題を解く力があると考えています。小学校4年生のレベル7と小学校6年生のレベル7では、正答できる問題の難易度は同じです。

ただし、小学校4年生の学力レベル7の児童が小学校6年生のレベル7の問題を解けるかという、解けない可能性が高いです。これは、学習指導要領により学習内容が定められているため、小学校6年生のレベル7の問題を小学校4年生の児童はまだ習っていないためです。

【Q6】

小学校6年生での学力レベルが3(小学校6年生の中では一番低い学力レベル)の場合、学力レベル3より下のレベルがつけられない状態になっています。

この場合の学力レベルは、どのような基準でつけているのですか。

【A6】

小学校6年生の調査において学力を測定できる問題の範囲は、レベル3からレベル9と設定しています。レベル3の問題に1問でも正答していれば、レベル3の学力がある可能性があるため、レベル3に位置付けられるようになっています。この場合、レベル3を明らかに下回るのは、正答数が0問の場合であり、その場合は、レベル自体が表示されないこととしています。

第2章

調査結果の活用

個人結果個票の見方や、非認知能力・学習方略に関する分析、調査の活用方法について掲載しています。

校内研修の資料や、調査結果を分析する際の参考としてご活用ください。



(1) 個人結果個票の見方について

児童に配布される個人結果個票の例（小学校第6学年国語）

今年度の調査で測定した児童の学力のレベルが示される。

1つのレベルは、さらに3層（A、B、C）に分かれている。

例は、レベル7-Cの学力を示している。

今後の学習に生かせるように、一人一人に応じた学習に関するアドバイスが示される。

教科の領域等別正答率として、県の平均正答率と児童の正答率が示される。

児童の得意分野と苦手分野が分かる。

国語

教科に関する調査結果

今までの学力の変化

あなたは、「レベル7」の学力があります。

		小学校4年生	小学校5年生	小学校6年生	中学校1年生	中学校2年生	中学校3年生
高	レベル12						
	レベル11						
	レベル10						
↑	レベル9						
	レベル8						
	レベル7						
↓	レベル6						
	レベル5						
	レベル4						
低	レベル3						
	レベル2						
	レベル1						

白い部分が学力の調査範囲を示している。

小学校6年生の場合は、レベル3からレベル9までが調査範囲となる。

来年度は次の学年の欄に学力レベルが示される。これにより学力の変化を見ることができる。

学習に関するアドバイス

昨年度この調査を受けていないため、昨年度からの学力の伸びはわかりませんが、あなたには表示されているレベルの学力があります。日々の授業を大切に、積極的に学習に取り組んでいきましょう。

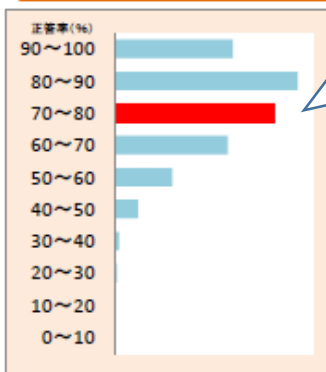
話すこと・聞くこと・書くことは、よくできました。さらに力をのばすために、話し合いをする時には、自分の役わりに応じて工夫して話すように心がけましょう。例えば、自分の考えをはっきり示してから理由を言ったり、発言内容を短くまとめたりするとよいです。書くことでは、図表やグラフなどの資料から読み取った内容をもとにして自分の考えを書けるようにしましょう。

また、物語を読む時には、気持ちの変化に気付くように意識しましょう。そのため、登場人物の様子や考えについて順を追いながら読むようにするとよいです。説明文を読む時は、筆者の考えが書かれている文や話題の中心となる言葉に注目しながら読むと、内容がよく分かります。

教科の領域等別正答率

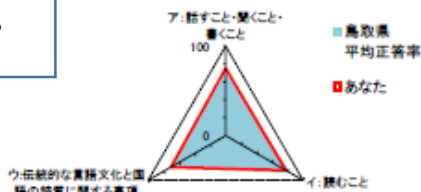
	あなたの正答数	総問数	あなたの正答率(%)	県全体の平均正答率(%)
ア	3	4	75.0	70.0
イ	7	9	77.8	83.4
ウ	12	17	70.6	71.7
全体	22	30	73.3	75.0

県全体の正答率分布



県全体の正答率分布と、児童の正答率が示される。

県全体における、おおよその位置が分かる。



伝統的な芸術文化と国語の特質に関する事項

あなたの正答率は実線(◇)、県平均正答率は(◆)で表しています。

あなたの正答率は、県全体の正答率分布の に含まれています。

(2) 非認知能力・学習方略に関する分析について

平成27年度から本調査を実施している埼玉県教育委員会が、平成27年度から平成30年度に得られた毎年約30万人分の調査データを、統計学や教科教育の専門的な研究機関である慶應大学のSFC研究所へ委託して分析を行った結果、次のようなことが分かってきました。

◆「主体的・対話的で深い学び」は、子どもたちの「非認知能力」や「学習方略」の向上を通して、学力を向上させる。

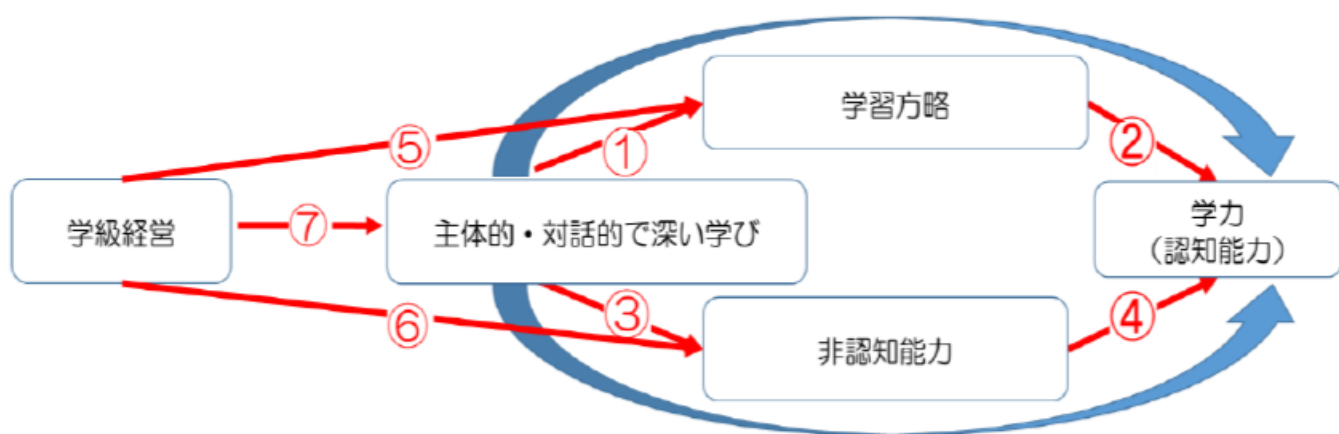
(下図①～④)

◆「学級経営」が、「主体的・対話的で深い学び」の実現や、子どもたちの「非認知能力」「学習方略」の向上に重要である。

(下図⑤～⑦)

⇒「学級経営」がよいほど、「主体的・対話的で深い学び」が実現しやすい。

⇒「学級経営」がよいほど、「非認知能力」「学習方略」を伸ばしやすい。



鳥取県教育委員会では、このような先進的な知見を生かし、非認知能力や学習方略の課題解決を通して、学力の向上に取り組んでいきます。

ここでは、非認知能力や学習方略等について説明します。
非認知能力や学習方略等の調査結果の活用については、14ページで説明している帳票40を活用し、一人一人の非認知能力や学習方略等の課題を見だし、その解決を図ることに生かしてください。それが学力向上につながると考えられます。

【1】非認知能力について

テストで計測される学力やIQなどとは違い、自分の感情をコントロールして行動する力があるなど性格的な特徴のようなものです。本調査では「**自制心**」「**自己効力感**」「**勤勉性**」「**やりぬく力**」の4種類について質問しています。

①自制心	自分の意思で感情や欲望をコントロールすることができる力
------	-----------------------------

(例) イライラしていても人に八つ当たりしない など

【児童生徒質問紙の項目】令和2年度の小学5年生に質問

- ・じゅ業で必要なものをわすれた
- ・他の子たちが話をしているときに、その子たちのじゃまをした
- ・何からんぼうなことを言った
- ・つくえ・ロッカー・部屋が散らかっていたので、必要なものを見つけることができなかった
- ・家や学校で頭にきて人やものにあたった
- ・先生が、自分に対して言っていたことを思い出すことができなかった
- ・きちんと話を聞かないといけないときにぼんやりしていた
- ・イライラしているときに、先生や家の人（兄弟姉妹は入りません）に口答えをした

②自己効力感 自分はそれが実行できるという期待や自信

(例) 難しい問題でも自分ならできると考えられる など

【児童生徒質問紙の項目】令和2年度の小学6年生に質問

- ・授業ではよい評価をもらえるだろうと信じている
- ・教科書の中で一番むずかしい問題も理解できると思う
- ・授業で教えてもらった基本的なことは理解できたと思う
- ・先生が出した一番むずかしい問題も理解できると思う
- ・学校の宿題や試験でよい成績をとることができると思う
- ・学校でよい成績をとることができると思う
- ・授業で教えてもらったことは使いこなせると思う
- ・授業のむずかしさ、先生のこと、自分の実力などを考えれば、自分はこの授業でよくやっているほうだと思う。

③勤勉性**やるべきことをきちんとやることができる力****(例) 宿題が出されたらきちんと終わらせる など****【児童生徒質問紙の項目】令和2年度の小学4年生に質問**

- ・ うっかりまちがえたりミスをしたりしないように、やるべきことをやります
- ・ ものごとは楽しみながらがんばってやります
- ・ 自分がやるべきことにはきちんとかかわります
- ・ じゅ業中は自分がやっていることに集中します
- ・ 宿題が終わったとき、ちゃんとできたかどうか何度もかくにんをします
- ・ ルールやじゅん番は守ります
- ・ だれかとやくそくをしたら、それを守ります
- ・ 自分の部屋やつくえのまわりはちらかっています
- ・ 何かを始めたら、ぜっ対終わらせなければいけません
- ・ 学校で使うものはきちんと整理しておくほうです
- ・ 宿題を終わらせてから、遊びます
- ・ 気がちってしまうことはあまりありません
- ・ やらないといけないことはきちんとやります

④やりぬく力**自分の目標に向かって粘り強く情熱をもって成し遂げられる力****(例) 失敗を乗り越えられる など****【児童生徒質問紙の項目】****※鳥取県は今年度の調査なし(令和2年度の埼玉県学力調査において中学1年生に質問)**

- ・ 大きな課題をやりとげるために、失敗を乗り越えてきました
- ・ 新しい考えや計画を思いつくと、前のことから気がそれてしまうことがあります
- ・ 興味をもっていることや関心のあることは、毎年変わります
- ・ 失敗しても、やる気がなくなってしまうことはありません
- ・ 少しの間、ある考えや計画のことで頭がいっぱいになっても、しばらくするとあきてしまします
- ・ 何事にもよくがんばるほうです
- ・ いったん目標を決めてから、そのあと別の目標に変えることがよくあります
- ・ 終わるまでに何か月もかかるようなことに集中し続けることができません
- ・ 始めたことは何でも最後まで終わらせます
- ・ 何年もかかるような目標をやりとげてきました
- ・ 数か月ごとに、新しいことに興味をもちます
- ・ まじめにコツコツとやるタイプです

【2】 学習方略について

児童生徒が学習効果を高めるために意図的に行う活動（学習方法や態度）のことです。とっとり学力・学習状況調査では、「柔軟的方略」「プランニング方略」「作業方略」「人的リソース方略」「認知的方略」「努力調整方略」の6つに分類しています。

①柔軟的方略	自分の状況に合わせて学習方略を柔軟に変更していく活動
--------	----------------------------

(例) 勉強の順番を変えたり、分からないところを重点的に学習したりするなど

【児童生徒質問紙の項目】

- ・勉強のやり方が、自分に合っているかどうかを考えながら勉強する
- ・勉強で分からないところがあったら、勉強のやり方をいろいろ変えてみる
- ・勉強しているときに、やった内容を覚えているかどうかを確認する
- ・勉強する前に、これから何を勉強しなければならないかについて考える

②プランニング方略	計画的に学習に取り組む活動
-----------	---------------

(例) 勉強を始める前に計画を立てる など

【児童生徒質問紙の項目】

- ・勉強するときは、最初に計画を立ててから始める
- ・勉強をしているときに、やっていることが正しくできているかどうかを確認する
- ・勉強するときは、自分で決めた計画に沿って行う
- ・勉強しているとき、たまに止まって、一度やったところを見直す

③作業方略	ノートに書く、声を出すといった「作業」を中心に学習を進める活動
-------	---------------------------------

(例) 大切なところを繰り返し書く など

【児童生徒質問紙の項目】

- ・勉強するときは、参考書や辞典などがすぐ使えるように準備しておく
- ・勉強する前に、勉強に必要な本などを用意してから勉強するようにしている
- ・勉強して大切だと思ったところは、言われなくてもノートにまとめる
- ・勉強で大切なところは、くり返して書くなどして覚える

④人的リソース方略

友人を利用して学習を進める活動

(例) 友だちに勉強のやり方やわからないところを聞く など

【児童生徒質問紙の項目】

- ・勉強でわからないところがあったら、友だちにその答えをきく
- ・勉強でわからないところがあったら、友だちに勉強のやり方をきく
- ・勉強のできる友だちと、同じやり方で勉強する
- ・勉強するときは、最後に友だちと答え合わせをするようにする

※埼玉県教育委員会の分析結果では、「人的リソース方略」は、児童生徒の学力と負の相関(人的リソース方略を利用する児童生徒ほど、学力が低くなる傾向)が報告されています。

⑤認知的方略

より自分の理解度を深めるような学習活動

(例) 勉強した内容を自分の言葉で理解する など

【児童生徒質問紙の項目】

- ・勉強するときは、内容を頭に思い浮かべながら考える
- ・勉強するときは、内容を自分の知っている言葉で理解するようにする
- ・勉強してわからないことがあったら、先生にきく
- ・新しいことを勉強するとき、今までに勉強したことと関係があるかどうかを考えながら勉強する

⑥努力調整方略

「苦手」などの感情をコントロールして学習への意欲を高める活動

(例) 分からないところも諦めずに継続して学習する など

【児童生徒質問紙の項目】

- ・学校の勉強をしているとき、とてもめんどろでつまらないと思うことがよくあるので、やろうとしていたことを終える前にやめてしまう
- ・今やっていることが気に入らなかったとして、学校の勉強でよい成績をとるために一生懸命がんばる
- ・授業の内容が難しいときは、やらずにあきらめるか、簡単なところだけ勉強する
- ・問題が退屈でつまらないときでも、それが終わるまでなんとかやり続けられるように努力する

(3) 主体的・対話的で深い学びの実現について

学級における主体的・対話的で深い学びの実現状況を数値化した値

【児童生徒質問紙の項目】※学年により、質問項目が異なります

あなたの〇年生の時の〇〇の授業では、次のようなことがどれくらいありましたか

- ・問題を解決するとき、それまでに習ったことを思い出して解決できたこと
- ・自分の考えを理由をつけて発表したり、書いたりできたこと
- ・ノートやワークシート、プリントに書いた授業のまとめを先生に見てもらおうこと
- ・グループで活動するとき、一人の考えだけでなくみんなで考えを出し合った課題を解決すること
- ・授業の始めに、先生から、どうやったら課題を解決できるか考えるように言われること
- ・授業の始めには気がつかなかった疑問が、授業の終わりに、頭に浮かんできたこと

※児童生徒質問紙の回答から算出した値のため、教師が取組を実施したかどうかではなく、児童生徒が取組の実施についてどう受け止めていたかという値となっています。

埼玉県の調査結果分析から、

「主体的・対話的で深い学び」の実施に加えて、「学級経営」が、子どもの「非認知能力」「学習方略」を向上させ、学力向上につながることが明らかとなっています。

(4) 帳票40を活用した分析について

帳票40には、**非認知能力、学習方略、主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)の実施**の児童質問紙の回答状況が示されています。とっとり学力・学習状況調査から見られる一つの側面ではありますが、数値が低い項目が課題となっている可能性があります。

例えば、下の表で**自己効力感、学習意欲(算数)(非認知能力)**が低い児童は、国語のレベルは9-Cですが、算数のレベルは6-Bとなっており、**自己効力感及び学習意欲(算数)**を高めれば、算数のレベルが上昇する可能性があります。

各学校においては、**帳票40**を用いて、児童の**非認知能力や学習方略等**の課題を分析し、その課題を解決するための取組を行ってください。

帳票40は、各学校に送付されたCD-ROMに入っています。

※帳票40の見方

- ・数値の範囲は5.0~1.0(5.0が最もよい数値)
- ・数値は児童生徒質問紙でそれぞれ5段階(5~1)の回答を集約したもの

令和2年度とっとり学力・学習状況調査(小学校6年生)

学力分析データ(学力レベル・伸び・学習方略・非認知)児童生徒別

鳥取県教育委員会

帳票40

学年	国語	算数・数学	R2結果									
	R2レベル	R2レベル	アクティブ・ラーニングの実施	学習方略						非認知能力		
				柔軟的方略	プランニング方略	作業方略	人的リソース方略	認知的方略	努力調整方略	自制心	自己効力感	学習意欲(算数)
6	9-C	6-B	4.1	4.2	3.8	4.3	4.5	4.3	3.8	-	2.0	1.8
6	8-C	6-C	2.5	3.1	3.0	2.8	3.5	2.8	3.0	-	3.2	3.0
6	7-B	5-A	3.4	1.6	1.7	2.8	3.0	3.3	2.6	-	2.6	2.8

アクティブ・ラーニングの実施の数値が他の項目より低く、課題となっている可能性がある。

柔軟的方略、プランニング方略(学習方略)の数値が他の項目より低く、課題となっている可能性がある。

自己効力感、学習意欲(算数)(非認知能力)の数値が他の項目より低く、課題となっている可能性がある。

(5) 校内での活用方法について

① 担当からの聞き取りや授業参観により、良い取組を把握します

【方法例① 担当からの聞き取り】

帳票40をもとに、非認知能力、学習方略、主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）の数値が高い学級や学年を担当している教員から、学年全体や教科指導で取り組んだことや、共通して実践した指導方法、指導のポイント等の聞き取りを行う。

＜聞き取り例＞

- ・子どもたちと接するとき、心がけていること（前向きな言葉かけ、一緒に遊ぶ等）
- ・授業の導入場面での工夫（興味をもたせる導入、めあて・見通しのもたせ方等）
- ・授業の展開場面での工夫（言語活動の充実、ペア・グループ活動の設定等）
- ・授業の終末場面での工夫（まとめの仕方、振り返りの充実等）
- ・学年で指導を徹底した取組（規律ある態度の指導、ノート指導、掲示物の工夫等）
- ・家庭学習の与え方（目安の時間の設定、チェックシートの活用、予習・復習等）

ポイント

- ・上記の例を参考にして、より具体的に聞き取ってください。
- ・工夫した取組などにも注目して聞き取ってください。

【方法例② 授業参観】

帳票40をもとに、非認知能力、学習方略、主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）の数値が高い学級や学年を担当している教員の授業を校内で参観する機会を設け、授業で見られた良い取組を把握する。

＜参観の視点の例＞

- ・主体的な学びを実現するための工夫
（めあてや見通しのもたせ方、まとめと振り返りによる学習の定着等）
- ・対話的な学びを実現するための工夫
（互いの考えの比較検討の工夫、教師と子ども・子ども同士の双方向の対話の実現等）
- ・深い学びを実現するための工夫
（問題解決的・探究的な学習の実践、思考を深める発問や板書等）
- ・言語活動の充実（描写、要約、説明、記録、報告等を文章等でまとめる活動等）



ポイント

- ・授業後の協議が深まるよう、参観の視点を示すなどの工夫をしてください。

② 「聞き取りの結果」や「授業参観の感想」等、分析結果を資料にまとめ、全体で協議、意見交換します。

帳票40をもとに、学年（学校）ごと、教員ごとに分析する

〇組は「プランニング方略」の値が高いね。どんな取組をしているのかな？

〇〇先生の△△の指導方法が子どもの力をつけていますね

〇年生の◇◇の取組が良い結果につながっているようです

私もその実践に取り組んでみよう！



全校で取り組んでいる☆☆の取組の効果が表れていますね

指導主事のアドバイスを取り入れてみよう

校内研修の例

【協議例①】帳票40をもとに、数値が低い子どもの状況を把握する

- 〇〇さんは、自己効力感と算数の学習意欲の数値が低いので、そこを高めれば算数の学力レベルが向上する可能性がある
- △△さんは、人的リソース方略の数値が低いので、すぐに友だちに頼りすぎる傾向がある

【協議例②】帳票40をもとに、学級（学年や学校）の傾向を把握する

- 〇年〇組は「アクティブ・ラーニングの実施」の数値が高い。これは、◇◇の取組が結果につながっているのではないか
- △年は2クラスともプランニング方略の数値が高い。これは、☆☆の取組の効果が表れているのではないか

③ 仮説を設定し、それに基づく取組、検証を行います。

- ◇協議、意見交換を経て仮説を設定し、それに基づいた効果的な取組を共有します。
- ◇取組を実践し、効果について検証を行います。

◆学年（学校）、教員独自の仮説を設定し、仮説に基づく取組、検証を行う。

<仮説>（協議・意見交換により設定）

（例）「授業で自分の考えを理由づけて発表したり、書いたりする機会を増やすことで、学力が伸びる子どもたちが増える。」

<重点項目>（本校の実態及び協議・意見交換から設定）

（例）①学力レベルが低い子どもへのきめ細かな指導を行う

②授業規律を大切にする

※上記①②は全教員で重点化し、取組を徹底する

本帳票の「アクティブ・ラーニングの実施」「学習方略」「非認知能力」の数値の範囲は、1.0～5.0となっています。

数値が高いほど、よい値となっています。

学年	組	出席番号	R2レベル	R2レベル	R2結果										
					アクティブ・ラーニングの実施	学習方略					非認知能力				
						柔軟的方略	プランニング方略	作業方略	人的リソース方略	認知的方略	努力調整方略	自制心	自己効力感	勤勉性	
			組平均	6-C	5-C	3.9	3.3	3.5	3.7	2.9	3.7	4.1	-	-	3.0
4	1	1		6-B	5-B	3.9	4.8	4.5	4.2	4.0	4.8	5.0	-	-	1.3
4	1	2		7-A	7-A	3.6	2.8	2.8	4.0	2.8	3.8	4.3	-	-	3.2
4	1	3		4-B	5-B	3.9	4.0	4.0	4.3	3.8	4.8	5.0	-	-	4.6
4	1	4		5-C	4-A	4.1	3.8	3.8	3.5	3.8	3.8	4.3	-	-	2.0
4	1	5		7-B	5-B	4.6	3.6	3.5	3.6	3.3	3.8	3.8	-	-	3.5
4	1	6		4-B	3-A	3.5	1.5	2.8	3.3	3.0	2.8	2.0	-	-	3.0
4	1	7		6-A	4-A	3.6	3.3	3.0	3.4	2.8	3.3	3.3	-	-	3.5
4	1	8		6-B	6-C	3.6	4.0	2.8	3.9	2.5	4.0	4.5	-	-	3.5
4	1	9		7-A	6-B	4.4	2.3	3.3	3.5	1.3	3.0	5.0	-	-	2.2
4	1	10		6-B	5-C	3.6	3.0	4.3	3.5	2.0	3.5	3.5	-	-	2.7

学級間で数値の差が大きい項目について、数値が高い学級でどのような取組の工夫をしているかを共有する。

個人内で数値が低い項目をピックアップし、どのような支援が必要か検討する。

学年	組	出席番号	R2レベル	R2レベル	R2結果										
					アクティブ・ラーニングの実施	学習方略					非認知能力				
						柔軟的方略	プランニング方略	作業方略	人的リソース方略	認知的方略	努力調整方略	自制心	自己効力感	勤勉性	
			組平均	5-A	4-B	3.4	3.8	3.2	3.4	2.7	3.4	3.6	-	-	3.0
4	2	1		6-B	4-A	3.5	4.0	3.5	3.6	2.8	3.3	4.3	-	-	4.0
4	2	2		7-A	6-C	3.0	3.2	2.8	3.4	3.3	2.8	3.0	-	-	2.6
4	2	3		7-C	5-B	3.3	2.8	2.5	3.2	2.8	2.8	3.3	-	-	3.2
4	2	4		7-C	5-A	3.6	3.3	1.8	2.4	2.0	2.5	2.3	-	-	2.8
4	2	5		5-C	4-B	4.2	4.6	4.8	4.5	2.8	5.0	5.0	-	-	1.9
4	2	6		5-A	6-C	3.4	3.8	3.2	2.8	2.3	2.5	3.8	-	-	2.7
4	2	7		7-A	5-A	3.2	4.0	3.5	3.7	2.8	3.3	3.5	-	-	3.3
4	2	8		7-B	3-A	4.0	5.0	4.3	3.8	4.0	4.8	2.8	-	-	1.8
4	2	9		7-A	6-C	3.7	4.3	4.3	4.3	2.8	4.5	5.0	-	-	4.5
4	2	10		3-B	2-B	2.3	2.8	1.2	2.0	1.8	2.3	3.5	-	-	3.6

第3章

調査結果活用協力校の取組 鳥取市立城北小学校

官課城北分
門教育城の
専務市立
室義取市
査会鳥取
調員会調
力委員だ
学教育組
省教育受
学指導取
科玉指取
学埼の指
部（元）の
長）小活
析学と授
方略を
察し
ま
し
た。



とっとり学力・学習状況調査の調査結果の分析と活用 ～鳥取市立城北小学校～

とっとり学力・学習状況調査分析活用の協力校とし、文部科学省大根田専門官に助言を受けながらその分析と活用について取組を行った。

まず、帳票40で示された非認知能力や学習方略の数値について、児童の個別の結果から特に数値が低い児童の学習の様子を担当が中心となって分析し、その手立てを考えた。次に、算数の授業研究会で授業公開した学級の非認知能力や学習方略が高い数値だった項目に注目し、その能力を高める指導についてのポイントを探った。

1 取組の概要

- 1 1 / 1 2 分析結果説明会
- 1 1 / 1 8 職員研修（校内）資料配布、説明（データの見方、分析のポイント等）
- 1 1 / 2 5 職員研修（校内）学年チームによる分析、授業改善ポイントの共有①
- 1 1 / 2 5・2 6、1 2 / 1 公開・研究授業（6年・算数／校内）
- 1 2 / 2 授業研究会（6年C組・算数／校内・高学年）
- 1 2 / 3 授業研究会（6年C組・算数／小教研・算数部会）
- 1 2 / 1 4～1 8 スマイル・ウィーク（個人票返却）アセス*1の結果も踏まえて児童の個別面談
※1アセス（ASSESS）：多様な背景を持つ子ども達の「学校適応感」を測定するために開発された尺度
- 1 2 / 2 3 学年主任会 授業改善ポイントの分析・共有②
 ⇒カリキュラム・マネジメント、後期後半の授業改善へ
- 1 / 6 文部科学省大根田専門官と調査結果についての協議
- 2月・3月 学年会・研究推進委員会（授業改善シートを活用した振り返り、成果や課題の共有）
 ⇒次年度の取組に向けて（授業・カリキュラム改善、個別の学習状況の引継）

2 分析①（個別の結果より）

作業方略に1点台の項目が多い児童や、ある特定の項目だけ極端に低い児童に着目し、その見立てと具体的な手立てを考察した。

◆4年生A児

作業方略の4つの項目が1点台であり、その他の項目の数値も低い傾向にある

AL	柔軟的	プランニング	作業	人的リソース	認知的	努力調整	勤勉性
3. 8	1. 8	2. 5	1. 5	3. 0	1. 5	1. 8	2. 8

【担任の分析】

- ・学び方を工夫し、ねばり強く取り組む態度がなかなか見られない。
- ・アセスの学習的適応（学習方法、学習意欲）の得点が低い。



【具体的な手立て】

- ・友達と学ぶ時間を確保し、学び合いながら最後までやり切れるようサポートする。
- ・自主学習を見合う機会を作り、友達の学習方法や内容等を自分の自主学習の参考にできるようにする。

◆ 6年生B児

項目によって数値のばらつきが大きく、「柔軟的」と「自己効力感」が、特に低い傾向にある

AL	柔軟的	プランニング	作業	人的リソース	認知的	努力調整	自己効力感	勤勉性
3. 3	1. 5	3. 3	2. 0	2. 8	4. 0	3. 0	1. 5	4. 0

【担任の分析】

- ・指示した活動は的確に行うが、学習の仕方を工夫して見ることは少ない。
- ・鳥取市共通6項目アンケート*2で否定的回答（「学校が楽しい」「授業にすすんで取り組んでいる」）が見られる

【具体的な手立て】

- ・別の視点や多様な見方を提供し、柔軟な考え方による活動を評価する。



※2 鳥取市共通6項目アンケート：鳥取市内のすべての小・中・義務教育学校において、定期的・継続的に行う学校生活や家庭生活に対する思いの変容を把握するための共通アンケート項目

3 分析②（クラス別の結果より）

算数の授業研究会で授業公開した学級の非認知能力や学習方略が高い数値だった項目に注目し、算数の授業における指導についてのポイントを考察した。

◆ 6年C組

鳥取県や鳥取市の平均値と比較すると、学習方略の「柔軟的方略」「プランニング方略」「認知的方略」、非認知能力の「自己効力感」「学習意欲」が高い傾向にある

	AL	柔軟的	プランニング	作業	人的リソース	認知的	努力調整	自己効力感	学習意欲
C組	4. 0	3. 6	3. 8	3. 4	3. 3	3. 9	4. 0	3. 4	3. 8
学校	3. 8	3. 3	3. 5	3. 2	3. 2	3. 7	3. 9	3. 3	3. 4
鳥取市	3. 9	3. 3	3. 4	3. 3	3. 1	3. 7	3. 9	3. 2	3. 5
鳥取県	3. 9	3. 3	3. 5	3. 4	3. 1	3. 7	4. 0	3. 3	3. 5

＜授業研究会で分析した算数における指導のポイント＞

◇学習方略「柔軟性」

- ・問題や「めあて」を子どもとつくる
- ・アプローチの選択・見直しを促す
- ・多様な見方・考え方を大切にする

◇学習方略「プランニング方略」

- ・見積りや計画を書きとめる
- ・「確かめ」や根拠を大切にする
- ・ノートに考えを残して振り返りを促す

◇学習方略「認知的方略」

- ・問題把握で既習との違いを明確にする
- ・既習事項と関係づける（問い、板書）
- ・表現や「言葉」を高めながらまとめる（子ども同士、子どもと共に）



◇非認知能力「自己効力感」

- ・個々に応じた評価・手立てを構想する
(活動の様相に応じた学び方の支援)
- ・多様な考えを認め、価値づける
- ・活用型の問題にチャレンジさせる

◇非認知能力「学習意欲」

- ・子どもの「生活・現実」と学習を結ぶ
- ・学習内容に即して「学び方」を育てる
- ・「教材の価値」に着目して教材分析や授業研究を重ねる



4 考察

児童の個別の結果を分析すると、配慮が必要であると感じている児童と、数値の低い児童が合致する場合もあったが、項目ごとのばらつきが大きかったり、特定の項目のみ低かったりする傾向がある児童もあり、教員の認識と数値にずれがある場合もあった。児童の様子を学習方略や非認知能力といった違う側面から分析でき、指導のアプローチについて考えるきっかけとなった。

また、算数の授業研究会で授業公開した学級について、数値を高めていると考えられる教育活動を分析した。その結果、授業で行っている様々な指導が、児童の学習方略や非認知能力を高めることにつながっていると考えることができた。しかし、1つの指導が、複数の項目に関係しているため、項目ごとに効果的な指導と結びつけることは難しいと感じた。また、それらの能力は、算数の授業だけで育てることができるものではなく、他教科の授業や授業以外の生活場面など、教育課程全体で培っていかなければいけないことを改めて認識することができた。

来年度は、学力の伸びと非認知能力や学習方略の伸びを見ることによって、学力向上に係る取組についてさらに詳細な分析や検証を進めていきたい。



